

一景話題

泉鏡花作

夫人堂

神戸かうべにあるにある知友ちいう、西本氏にしもとし、頃日このころ、攝津國摩せつゝのくにま耶山やさんの繪葉書えはがきを送おくらる、其その音信おとづれに、なき母ははのこひしさに、二里りの山路やまぢをかけのぼり候さぶらふ。靉靄たなびき渡る霞かすみの中に慈光じくわう浴あまき御姿おんすがたを拜まがみ候まうらひ。

しか／＼と認めしたゞられぬ。見みるからに可懐なつかしさ言いはんかたなし。此方こなたもおなじおもひの身みなり。遙はるかに其そのあたりを思おもふさへ、端麗たんれいなる其その御姿おすがたの、折をりからの若葉わかばかげに梢しすゑを籠こめたる、紫むらさきの薄衣うすぎぬかけて見みえさせ給たまふ。

地誌ちしを按あんずるに、摩耶山まやさんは武庫郡六甲山むこほり かふざんの西南せいなんに當あたりて、雲白くもしろく聳そびえたる峰みねの名ななり。山やまの蔭かげに瀧谷たきだにありて、布引ぬのびきの瀧たきの源みなもとといふも風情ふぜいなるかな。上のほるに三條みすぢの路みちあり。一ひとは其その布引ぬのびきより、一ひとは都賀野村つがのむらう

上野より、他は篠原よりす。峰の形峻嚴崎嶇たりとぞ。然も海を去ること一里ばかりに過ぎざるよし。漣の寄する渚に櫻貝の敷妙も、雲高き夫人の御手の爪紅の影なるらむ。

傳へ聞く、摩耶山ニ初利天王寺夫人堂の御像は、其昔梁の武帝、女人の産に悩む者あるを憐み、佛母摩耶夫人の影像を造りて大功德を修しけるを空海上人入唐の時、我が朝に齋き歸りしものといよ。

知ることの浅く、尋ぬること怠るか、はたそれ詣づる人の少きにや、諸國の寺院に、夫人を安置し勸請するものを聞くこと稀なり。

十歳ばかりの頃なりけん、加賀國石川郡、松任の驛より、畦路を半町ばかり小村に入込みたる片邊に、里寺あり、寺號は覺えず、摩耶夫人おはします。なき母をあこがれて、父ととも詣でしことあり。初夏の頃なりしよ。里川に合歡花あり、田に白鷺あり。麥や青く、桑の芽の萌黄に萌えつゝも、北國の事なれば、薄靄ある空に桃の影の紅染み、晴れたる水

に李の色蒼く澄みて、午の時月の影も添ふ、御堂の
あたり凡ならず、畑打つものゝ、近く二人、遠く一
人、小山の裾に數ふるばかり稀なりしも、浮世に遠
き思ありき。

本堂正面の階に、斜めに腰掛けて六部一人、頭よ
り高く笈をさし置きて、寺より出せしなるべし。其
の厨の方には人の氣勢だになきを、日の色白く、梁
の黒き中に、渠唯一人澁茶のみて、打憩らうて居た
りけり。

其の、もの靜に、謹みたる状して俯向く、背のい
と瘦せたるが、取る年よりも長き月日の、旅のほど
思はせつ。

よし、それとても臙氣ながら、彼處なる本堂と、
向つて右の方に唐戸一枚隔てたる夫人堂の大なる御
厨子の裡に、綾の几帳の蔭なりし、跪ける幼きもの
には、すら／＼と丈高う、御髪の艶に星一ツ晃々と
輝くや、ふと差覗くかとして、拝まれたまひし。浮

べる眉、畫ける唇、したゝる露の御まなざし。瓔珞の珠の中にびとへに白き御胸を、來よとや幽に打寛ろげたまへる、氣高く、優しく、かしこくも妙に美しき御姿を、何時も、まのあなりに見参らす。

今思出でつと言ふにはあらねど、世にも慕はしくなつかしきまゝに、餘所にては同じ御堂の又あらんとも覺えずして、此の年月をぞ過したる。されば、音にも聞かずして、攝津、摩耶山のニ利天王寺に摩耶夫人の御堂ありしを、このたびはじめて知りたるなり。西本の君の詣でたる、其の日は霞の靉靄きたりによ……音信の來しは宵月なりけり。

あんころ餅

松任の次手なれば、其處に名物を云ふべし。餅あり、あんころと云ふ。城下金澤より約三里、第一の建場にて、兩側の茶店軒を並べ、件のあんころ餅を

鶯ひさぐ
伊勢いせに名高なだかき、赤福餅あかふくもち、草津餅くさつもちのお
なじ姥うばケ餅もち、相似あひにたる類たぐひのものなり。

松任まつたがにて、いづれも賣競うりきそふなかに、何某なにがしと云いふあ
んころ、鄰國りんごく他郷たきやうにも其その名聞なまこゆ。ひとり其その店みせに
て製せいする餡あん、乾かわかず、濕しめらず、土用どようの中うちにても久ひさし
きに堪たへて、其その質しつを變かへず、格別かくべつの風味ふうみなり。其そ
家このなにかし、透とほき昔むかしなりけん、村鄰むらどなりに尋たづぬるも
のありとて、一日宵あるひよひのほど偶ふと家いえを出いでしが其そのまゝ
歸かへらず、搜さがすに處ところなきに至いたりて世よに亡なきものに極きはまり
ぬ。三年ねんの祥月命日しやうつきめいにちの眞夜中まよなかとぞ。雨強あめつよく風烈かせはげしく、
戸とを揺ゆすり垣かきを動うごかす、物凄ものすさまじく暴あるゝ夜よなりしが、
ずどんと音おとして、風かせの中なかより屋やの棟むねに下立おりたつものあ
り。ばたりと煽あふつて自おのづから上うへに吹開ふきひらく、引窓ひきまどの板いたを
片手かたてに擡もたげて、倒さかさまに内うちを覗のぞき、おいの、おいのとて、
若わかき妻つまの名なを呼よぶ。其その人ひと、面青おもてあせく、髭赤ひげあかし。下したに
寝いねたる其その妻つま、然さばかりの吹降つきぶりながら折をりからの
蒸暑むしあつさに、あぎたなくて、搔卷かいまきを乗出のりいでたる白しろき胸むね
に、暖あたき息いき、上うへよりかゝりて、曰いはく、汝なんぢの夫をつとなり。
魔道まどうに赴おもむきたれば、今いまは歸かへらず。されど、小兒等こどもらも
不便ふびんなり、活計たつきの術すべを教をしふるなりとて、すなはち餡あん

の製法を傳へつ。今はこれまでぞと云ふまゝに、頸
を入れて又差覗くや、忽ち、黒雲を捲き小さくなり
て空高く舞上る。傘の飛ぶが如し。天赤かりしとか
や。天狗相傳の餅と云ふもの此なり。

いつぞやらん、其の松任より、源平島、水島、手
取川を越えて、山に入る、辰口といふ小さな温泉に
行きて歸るさ、件の茶屋に憩びて、兒心に、ふと見
たる、帳場にはあらず、奥の別なる小さき部屋に、
黒髪の亂れたる、若き、色の白き、瘦せたる女、差
俯向きて床の上に起直りて居たり。枕許に藥などあ
り、病人たりしたるべし。

思はずも悚然せしが、これ、しかしながら、此の
頃にはあらしかし。

今は竹の皮づゝみにして汽車の窓に賣子出で、旅
客に鬻ぐ、不思議の商標つけたるが彼の何某屋たり。
上品らしく氣取りて白餡に小さくしたるものは何の
風情もなし、すきとしたる黒餡の餅、形も大に趣あ
るなり。

夏の水

松任まつたふより栢野水島かしのみずしまなどを過ぎて、手取川てとりがはを越こゆる
までに源平島げんへいじまと云いふ小驛せうえきあり。里さとの名なに因ちなみたる、
いづれ盛衰せいすいき記きの一ひと條たうあるべけれど、其それは未いまだ考かんがへず。
われ等らが此この里さとの名なを聞きくや、直たちに耳みみの底そこに響ひびき
來きたるは、松風玉まつかぜたまを渡わたるが如ごとき清水しみづの聲こゑなり。夏げの水みづ
とて、北國ほくこくによく聞きこゆ。

春はると冬ふゆは水湧みづわかず、椿つばきの花はなの燃もゆるにも紅べにを解とく
ばかりの雫しづくもなし。たゞ夏げ至しのはじめの第一日だいいちじつ、村むら
の人の寝心ねしんにも、疑うたがひなく、時刻じこくも違たがへず、さら／
と白銀しろがねの絲いとを鳴ならして湧わく。盛夏せいかさんぶく三伏さんぶくの頃ころともたれ
ば、影沈かげしづむ緑みどりの梢こずゑに、月つきの浪越なみこすばかりなり。冬至とうじ
の第一日だいいちじつに至いたりて、はたと止やむ、恰あたかも絃いとを斷たつ如ごとし。

周圍しゅうゐに柵さくを結ゆひたれど其それも低ひくく、錠ぢやうはあれど鎖ささ
ず。注連引しめひきゆ結ゆひたる。青あおく艶うせいかなる圓まるき石いしの大だいなる
下したより溢あふるゝを樋ひの口くちに受うけて木きくの柄杓ひしやくを添そへあり。
神業かみわざと思おもふにや、六部順禮ろくぶじゆんれいたど遠とおく來きたりて賽さいすとて、
一文錢いちもんぜん二文錢にもんぜんの青あおく錆さびたるが、圓まるき木この葉はの如ごとく

あたりに落散りしを見たり。

深く山の峽を探るに及ばず。村の往來のすぐ路端に、百姓家の間に恰も總井戸の如くにあり。いつたりけん、途すがら立寄りて尋ねし時は、東家の媪、機織りつゝ納戸の障子より、西家の子、犬張子を弄びながら、日向の縁より、人懐しげに膽りぬ。

甲冑堂

橘南谿が東遊記に、陸前國苅田郡高福寺なる甲冑堂の婦人像を記せるあり。

奥州白石の城下より一里半南に、才川と云ふ驛あり。此の才川の町末に、高福寺といふ寺あり。奥州筋近來の凶作に此寺も大破に及び、住持となりても食物乏しければ僧も不住、空寺となり、本尊だに何方へ取納めしにや寺には見えず、庭は草深く、誠に狐鼻のすみかといふも餘あり。此の寺中に又一ツの小堂あり。俗に甲冑堂といふ。堂の書附には故將

堂とあり、大さ纒に二間四方許の小堂たり。本尊だ
に右の如くなれば、此小堂の破損はいふ迄もなし、
やう／＼に縁にさがり見るに、内に佛とてもなく、
唯婦人の甲冑して長刀を持ちたる木像二つを安置せ
り。これ、佐藤繼信忠信兄弟の妻、二人都にて討死
せしのち、其の母の泣悲しむがいとしさに、我が夫
の姿をまなび、老いたる人を慰めたる、優しき心を
あはれがりて時の人木像に彫みしものなりといふ。
此の物語を聞き、此像を拝するにそゞろに落涙せり。

甲冑堂の婦人像のあはれに繪の具のあせたるが、
遙けき大空の雲に映りて、虹より鮮明に、優しく讀
むものゝ目に映りて、其の人恰も活けるが如し。わ
れら此の烈し大都會の色彩を視むるもの、奥州邊の
物語を讀み、其の地の婦人を想像するに、大方は安
達ヶ原の婆々を想ひ、もつぺ穿きたる姉をおもひ、
紺の禪の媽々をおもふ。同じ白石の在所うまれなる、
宮城野と云ひ信夫と云ふを、芝居にて見たるさへ何
とやらん初鰹の頃は嬉しからず。たゞ南谿が記した
る姉妹の此の木像のみ、外ヶ濱の沙漠の中にも緑水
のあたり、花菖蒲、色のしたゝるを覺ゆる事、巴、

山吹の其にも優れり。幼き頃より今も亦然り。

元禄の頃の陸奥千鳥には――木川村入口に鎧摺の
岩あり、一騎立の細道なり、少し行きて右の方に寺
あり、小高き所、堂一宇、次信、忠信の兩妻、軍立
の姿にて相雙び立つ。

軍めく二人の嫁や花あやめ。

また、安永中の續奥の細道には――故將堂女
體、甲冑を帶したる姿、いと珍し、古き像にて、彩
色の剥げて、下地なる胡粉の白く見えたるは、

卯の花や緘し毛ゆらり女武者。

としるせりとぞ。此の兩様とも悉しく其の姿を記
さざれども、一讀の際、われらが目には、東遊記に
寫したると同じ状に見えて最と床し。

然るに、觀聞志と云へる書には、――齋川以
西有羊腸、維石巖々、嚼足、蹄爪、一高坂也是以馬

きくわいをうれふ ひとけんかんをいたむ 憂^ニ、人痛嶮艱、王勃所謂、關山難踰者、方是平
てかしんいすべし どんやれあぶみのさかとしようす 可信依、土人稱破鐙坂、破鐙坂東有一堂、中置二女
おく みにじゆういのふくをつけ 影、身着戎衣服、頭戴烏帽子、右方執弓矢、左方撫
うをぶす 刀劍 ー ー とありとか。

此の女像にして、もし、弓矢を取り、刀劍を撫す
とせんか、いや、腰を踏張り、片膝押はだけて身構
て居るやうにて姿甚だとのはず。此の方が眞なら
ば、床しきは半ば失せ去る。讀む人々も、かくては
筋骨の逞しく、膝節手ふしもふしくれ立ちたる、が
んまの娘を想像せずや。知らず、此の方は或は畫像
などにて、南谿が目のあたり見て寫し置ける木像と
は違へるならんか。其の長刀持ちたるが姿なるなり。
東遊記なるは相違あらじ。またあらざらん事を、わ
れらは願ふ。觀聞志もし過ちたらんには不都合なり、
王勃が謂ふ所などは何うでもよし、心すべき事なら
ずや。

近頃心して人に問ふ、甲冑堂の花あやめ、あはれ
に、今も咲けるとぞ。

唐土の昔、感寧の時、韓伯が子某と、王蘊が子某
と一、いづれ華胄の公子等、一日相携へて行きて、
土地の神、蔣山の廟に遊ぶ。廟中數婦人の像あり、
白皙にして甚だ端正。

三人此の處に、割籠を開きて、且つ飲み且つ大に
食ふ。其の人も無げなる事、恰も妓を傍にしたるが
如し。剩へ酔に乗じて、三人おの／＼、其中中三婦
人の像を指し、勝手に選取りに、おのれに配して、
胸を撫で、腕を壓し、耳を引く。

時に、其の夜の事なりけり。三人同じく夢む。夢
に蔣侯、其の傳教を遣はして使者の趣を曰さす。曰
く、不束なる女ども、猥に卿等の榮顧を被る、眞に
不思議なる御縁の段、祝着に存するもの也。就ては、
其の日、恰も黄道吉辰なれば、揃つて方々を婿君に
お迎へ申すと云ふ。汗冷たくして獨りづゝ夢さむ。
明くるを待ちて、相見て口を合はするに、三人符を
同じうして聊も異なる事なし。於是青くなりて大に
懼れ、齊しく牲を備へて、廟に詣つて、罪を謝し、
哀を乞ふ。

其の夜又俱に夢む。此の度や蒋侯神、白銀の甲冑
し、雪の如き白馬に跨り、白羽の矢を負ひて親しく
自ら枕に降る。白き鞭を以て示して曰く、變更の議
罷成らぬ、御身等、我が處女を何と思ふ、海老茶で
はないのだと。

木像、神あるなり。神なけれども靈あつて來り憑
る。山深く、里幽に、堂宇廢頽して、愈々活けるが
如く然る也。